

哲学者のパラドックス

——ディドロの唯物論あるいは人間学——

沢崎 壮宏

「哲学は、現代の支配的趣味を形づくっているが、われわれのもとで、進歩をとげることによって、失った時を回復し、われわれの祖先がそれに刻みつけたような軽蔑に復讐しようと欲しているように見える」(『百科全書序説』第2部)⁽¹⁾というダランベールの台詞は、光の闇に対する宣戦布告であるというより、すでにその勝利宣言であり、『百科全書』(*Encyclopédie*, 1751-72)がそのマニフェストであることはよく知られている⁽²⁾。その共同編集者であるディドロは百科全書派の先頭に立ち、光の世紀(*le siècle des lumières*)を牽引する光の哲学者(*philosophes des lumières*)である。その光り輝くはずの言説が、しかしながら、多くの矛盾を孕むように見えることは、すでにその同時代人たち(特にパリソン)の批判的であり、それ以降、その混乱は好意的にも悪意的にも解釈されてきた。好意的に解釈されるにしても混乱が消えるわけではないから、哲学史の伝統は彼に即興のプリンス、気まぐれな思想家の烙印を押してきたのであり⁽³⁾、現在、その哲学はその名前ほどよくは知られていない。

そうはいうものの、ディドロ哲学を整合的な体系として再現しようとする試みが皆無であると言えば誤りであり、その唯物論にマルクスの弁証法的な唯物論を準備させようとする伝統があることは指摘しておかなければならない⁽⁴⁾。われわれもまたディドロ哲学の整合的な再構成を試みようとするものであるが、そのような伝統には従わない。というのも、その哲学の本質的に逆説的な性格を尊重するならば、独断的なテーゼを先取りさせることほどディドロの本意に反することはないと思われるからである。われわれは、そうはいうものの、そのパラドックスがその整合的な再構成の可能性そのものまでも奪ってしまうとは考えない⁽⁵⁾。パラドックスがその影を落とすもの、それはディドロの言説ではなく、哲学あるいは学問そのものなのである。似非学問を告発し、その不合理性を悪魔払いする光の哲学者たち、その先頭に立つはずのディドロは、合理性の内側に、正しくその出発点にこそ、それゆえに決して赦うことのできない非合理性を見取ってしまう。闇を照らす光そのものの中にどうにも照らしようのない闇を見出してしまうディドロ、彼は経験主義的なオプティミストから最も遠い。光の世紀におけるスキャンダル、純粋な経験論の可能性を否

定し、常識への回帰を訴えるデイドロは、実のところ、人間学の最初の熱烈な支持者、最初の実証主義者である⁶⁾。

1. 光を疑う光の哲学者

ヴォルテールの『哲学書簡』(仏語原著 1734)がフランスにおけるアングロ・フィルを決定的にした。ベーコンの権威は中でも絶大であり、彼の現象主義的方法論の影響は根強く、『百科全書』の刊行という一大事業は、そもそも、いわゆる「ベーコンの表」からその着想を得ているし、その系統樹が主としてベーコンに負うものであることは、ダランベールが告白している通りである(『百科全書序説』第2部)。ニュートンは現象主義の自然学における使用によって、ロックはその認識論における使用によって、それぞれ、ベーコンの権威を継承する。

ベーコンと同じく支持する経験論者デイドロは、しかしながら、仮説の必要を説くことによってニュートンの権威に挑戦し、観念説から論理的に独我論を導くことによってロックの権威に難癖をつけるであろう。

1.1. 感覚主義(le sensualisme)

生得説を否定することから出発することは経験論者のもはや常套手段であるけれども、意識の透明説を受け入れないデイドロは、さらに、内観(introspection)の不可能すら宣言することによって感覚主義にまで至る。それは個々の感覚(sentiment)をアトムと見なす原子論的心理学であり、その感覚(印象)の生成についてはもはや黙るほかないような立場である。だが、内観する手続きにもはや何のリアリティーも認めないデイドロに、どのような心理学の可能性が残されているのだろうか。

「感覚器官の社会(*la société des sens*)」と呼ばれる思考実験を引き合いに出して考察してみよう。『聾啞者書簡』が人間に「形而上学的解剖」を施して、その感覚器官の一々を人間化するとき、デイドロによれば、そのような人間の構成する社会は狂人の社会であるだろう。

「私が指摘することは次のことだけである。ある感覚器官が豊かになればなるほど、それはますます個別的概念を持ち、他の感覚器官にはますます常軌を逸しているように見えるだろう。彼は他の器官を劣った存在者として扱うだろう。だが、反対に、この劣った存在者たちは彼のことを狂人であると真剣に見なすだろう。彼らのうちで最も愚かな者でさえ自分のことを最も賢いと間違いなく思い込むだろう。ある感覚器官は自分が最も良く知っていることに限って反論されるだろう」(*Lettre*

à Mlle La Chaux de mai 1751, I 119-120⁽⁷⁾。

われわれは上の引用から、先ず、ディドロの心理学が類比に立脚しており、そこでは、心的現象への言及が物的現象に翻訳されうる範囲に予め限定されていることを指摘することができる。ディドロは、さらに、大脳にコギトの肩代わりをさせて、心理学を解剖学に還元しようとさえするだろう。マテリアルな語だけで構成される心理学は、したがって、物心の比較可能性を前提し、その帰納的な推論が完全な厳密さを許さないならば、完全な決定論の実現は、結局のところ、夢物語でしかない。

われわれは、第二に、ディドロの感覚主義が相対主義に陥ることを指摘することができる。実在性の唯一の源泉である感覚、その始原性を強調すればするほど、その個別性ばかりが目立つことになり、認識の源泉を感覚にのみ認める者は、とどのつまり、他者との連絡の不可能、独我論に陥らざるをえない。そのように考えるならば、われわれがコスモスと呼ぶものは、実のところ、われわれの感覚の寄せ集めでしかなく、個体の数だけ、いや、感覚器官の数だけ宇宙があることになってしまう。

さて、学問の可能性が観念の連合の可能性に全面的に依存するとき、感覚主義が相対主義に陥るならば、われわれに学問の可能性は残されるのであろうか。

1.2. デザインに基づく論証の無効

18世紀の前半が実験神学にその理神論(le déisme)を謳歌させたことは疑いない⁽⁸⁾。その第一の要因が現象主義の浸透であることは言うまでもなく、存在論的な証明がもはや機能しない以上、存在は自然の中に感じられるしかないの、神は、もし存在するならば、自然の中にこそ探されるのでなければならぬ。神学者の目は、今後、思弁によりも自然に向けられる。第二の要因は機械論的宇宙観の定着である。力を伝達するだけの機械、力を産出することのない機械、要するに、宇宙が機械であるならば、そこに自然発生(génération spontanée)の可能性を受け入れる余地はもはやないように見える。だからこそ、ユブフォンは機械にあらかじめ生命原理(molécules organiques vivantes)を認めようとするのであり(*Histoire des animaux*)、それに我慢できないならば、宇宙の外に有機的な秩序を形成する力の根拠を求めるのでなければならぬ。というのも、顕微鏡が暴露したばかりの微小世界の調和が前成説(préformationisme)を支持するからであり⁽⁹⁾、そのような実験・観測機器の改良こそが理神論を台頭させる第三の要因にほかならない。ルーベが昆虫という驚異からそのベールを剥がすとき、その観察者がそこにデザインを読み取らないことは、そして、そのデザイナーの存在を推論しないことはほとんど不可能である。

われわれは、しかしながら、「存在の連鎖(la chaîne des êtres ou l'échelle de la nature)」を完成するかのように見える新しいオーダーの発見が、同時に、その連鎖の不動性を脅かす諸刃の剣であることを忘れないでおこう。『盲人書簡』の無神論がセンセーションを巻き起こす以前のデイドロは、普通、理神論者と解釈されるけれども、実は、その最初の著作『哲学断想』がすでに無神論を予告している。

「私がある有名な教授[Rivard]の手帳を開いてみると次のようなことが書いてあった。「無神論者たちよ。運動が物質に本質的であるという君らの意見を認めよう。しかしそこから何を君たちは結論するのか。宇宙は諸原子の偶然の流れから生まれて来たともいうのか。もしそうなら、ホメロスの『イリアス』やヴォルテールの『アンリアッド』も諸原子の偶然の流れの結果であると言ってもらいたい位だ。私だったら、こんな推論は無神論者に対しては控えるであろう。もしそんな比較をしようものなら、彼に都合の良い口実を与えるようなものである。彼はこんな風に言うであろう。「確率分析の法則に従うならば、あるものが可能である時に、それが生じて来るのに何ら不思議はないし、そうした事件の起こることの困難さはサイコロを振る回数によって埋め合わされる。ある回数振れば、私は十万個のサイコロを一度に全部6にすることができよう。『イリアス』を偶然に創り出すために必要となる文字の総数がどれほど大きくとも、それが有限であるならば、私はサイコロを有限回振って、その申し出を実現することができるのである。サイコロを振る回数が無限に許されるならば、私の成功も無限になるであろう。(さらに彼は言い続けるであろう)、君は物質が永遠の昔から存在し、運動が物質に本質的であるという私の意見に賛成してくれる。そのご好意に報いるべく、私も君と共に、宇宙は無限であり、原子の数も無限であり、君にとっては驚異であるその秩序がいかなる所でも裏切られていないということを確認しよう。さて、これら二つの証言からは、こういうことしか出て来ない。偶然に宇宙を創り出す可能性はとても小さいが、サイコロを振る回数は無限である。すなわち、宇宙創造の困難さはサイコロを振る回数の多さによって十二分に埋め合わせられる、ということである。何が理性に悖るといって、物質は永遠の昔から動いており、無数の可能な組合せの中には無数の望ましい順列があるのに、相繼いで理性が獲得した無数の結合の中には、何らの望ましい順列は見られなかったと考えることほど、理性に悖るものはないであろう。というわけであるから、人間は、宇宙が現に誕生することよりもカオスが持続するという仮説の方に驚くに違いない」と(『哲学断想』21)。

上の引用がデザイン論証の無効宣言であるならば、われわれは、デイドロがその知的キャリアのそもそも最初から無神論者であった、と結論できそうである。時空間の無限に物質量の無限を併せて認めるならば、そのような宇宙がコスモスであることに驚く理由は何

もなく、むしろ、それがカオスである場合にこそわれわれは驚くべきなのである、と言う。驚くほどのものでないならば、コスモスの根拠をわざわざ求めて神の存在を推論することにしだした説得力は発生しない。「存在の連鎖」を認めなければならないことは譲るにしても、それはありふれた偶然の一つの結果でしかなく、したがって、より重要なことであるが、その秩序が永続すると考える理由はない、ということになる⁽¹⁰⁾。「種」の変動を予言するディドロ、彼はリンネの恣意的な分類法を痛烈に批判する最大の反方法主義者でもある(『自然の解釈に関する断想』49)。

さて、宇宙を形成し、その調和を永遠に維持するはずの自然法則、ディドロの無神論がその永遠性を剝奪してしまうならば、われわれに学問の可能性は残されるのだろうか。

1.3. 観念説のアポリア

ディドロはパーグリーの『ハイラスとフィロナスとの三対話』(仏訳 1750)の読者であったが、観念説を論理的に徹底して独我論に陥ることは両者の共通点であり、その克服は両者に共通の哲学的課題である。いや、両者に限らず、観念説を支持する近代のあらゆる哲学者が懐疑論に対する態度決定を迫られていたと言わなければならないのかもしれない。その懐疑論の正体は独我論であり、その厄介な点は、それが経験主義的な観念説の論理的に妥当な結論であるということである。エゴティスト(égotistes, égomets, égomistes, égométistes)と呼ばれる独我論者が実際に存在していたことが知られており、大抵の場合、彼らは真面目に受け取られていなかった。論理的に妥当な結論であるとはいえ、それほど常識からかけ離れていたということである。

「観念論者とは、自分の存在と自分自身の内側で継起する感覚とについてのみ意識をもち、その他の一切を容認しない哲学者のことである。これは、盲人でなければ思いつきようのないとんでもない学説である」(『盲人書簡』I304)という台詞を聞く限り、ディドロは、観念説と言えば独我論にほかならないと考えており、しかも、その立場に決して好意を抱いていない。好意を抱くどころではないとはいえ、その論理的な拘束力に抗する術なく、手をこまねいていることもまた事実であり⁽¹¹⁾、避けえない論理的結論は、同時に、どうしても受け入れることのできない意見でもある、という事態に陥っている。論理と常識との間の非決定は終に彼の最晩年に至るまで解決されないままであるだろう⁽¹²⁾。もう、まるで、理性が常識を欠いているとでも言うしかない。

ディドロは独我論を克服する解決策を終に与えることができなかった。唯物論者ディドロは、自分のテーゼが夢と終わるかもしれないことを自覚している点で、他の唯物論者とは異なるのであるが、それにしても、夢でしかないかもしれない学問、その危機を何とか

して救うことはできないのだろうか。

1.4. 自然の解釈としての自然学

われわれは、光の哲学者であるはずのディドロの思想が学問の可能性に重大な危機を招くことを見てきた。その感覚主義は相対主義に至って観念連合の鎖を断ち切り[1.1.]、その無神論は現象を永遠に支配するはずの自然法則からその永遠性を剥奪し[1.2.]、そのかりそめのコスモスですらひょっとしたら夢でしかないのかもしれない[1.3.]。「一つの事実の絶対的な独立ということは、全体という観念と相容れず、全体の観念なしには哲学もまたありえない」(『ダランベールとディドロとの対話』II 111)ならば、すなわち、哲学とは一般性の追求そのものであるならば、ディドロは、要するに、哲学の不可能を宣言しているのであるだろうか。

1.4.1. 唯名論的数学観

ディドロに学問の危機を招来させる最も重要な要因の一つは、彼が生得観念説を放棄していることである。そもそも、観念説の可能性を切り拓いたデカルトは、生得観念への救済の訴えを自らに許すからこそ独我論を克服し、自然学にリアリティーを回復することができるのであり、デカルトにその生得説を着想させるもの、それが数学における分析の連続きであることはよく知られている。デカルトほどの天才ではないにしても数学に精通しているはずのディドロは、しかしながら、数学のいかなる連続きにも発見の機能を認めず、そのあらゆる命題をトートロジーであると見なしてしまう。

「私たちは現在、諸科学における根本的変革の時期に差しかかっている。人びとの精神が道徳や文学や博物学や実験物理学に対して抱いているように思われる愛好心から察して、私は、思い切ってこう断言したい位だ。100年を出ないうちに、ヨーロッパでは、大幾何学者を3人と数えることができなくなるだろう、と。この科学は、バルヌーイ、オイラー、モーペルチュイ、クレロー、フォンテーヌ、ダランベール、ラグランジュなどのような大家によって打ち捨てられた地点で、はたと歩みを止めてしまうであろう。彼らはヘラクレスの円柱を建てたてたようなものだ。誰もそれを超えて進むことはないだろう」(『自然の解釈に関する断想』4)。

われわれは、このままで見当はずれのディドロの予想から、彼が唯名論の伝統を継承していることを指摘することができる。数学とは、そこでは、同じ規約を巡って、言葉の上での取り決めを別の形で繰り返してみせるだけの「一種の一般形而上学」(*ibid.*, 2)であり、

そのようにして同じ個所で足踏みを繰り返すだけの人間知性であるならば、相互に独立な諸感覚を統一して相対主義を克服すること、それは、人間知性にとって荷の重すぎる課題であり、その場合、哲学者が誤らないことの保証はもはやどこにも見つからない。それでも前進したければ、すなわち、哲学することを止めたくなければ、そのためには、知性の忠告に耳を傾けず、思弁を抜け出し、論理を逸脱することがどうしても必要である。

個々別々で相互に独立な諸感覚、哲学あるいは学問とはそれらに統一を与えて体系を建てようとするにほかならない。結びつきのないところに結びつきを想定するためには論理を飛び越えなければならないが、論理を逸脱するならば、誤謬と背中合わせの危険に忽ち身を晒すことになる。哲学することは危険を冒すことである。前進するチャンスを求めて誤りの危険を敢えて冒そうとすることである。だが、われわれはどのようにして論理を超えることができるのだろうか。

1.4.2. 想像力の形而上学

デイドロは、光の世紀において、ニュートンの権威に逆らって仮説の重要性を主張することのできる稀有の自然哲学者であり、実験・観察の理論負荷性を指摘することのできる洗練された経験論者である。時代の寵児コンディヤック(*Traité des systèmes*, 1749)が純粋な経験論(vrais systèmes)を支持してあらゆる事実を事実でもって説明しようとするとき、盟友デイドロはその不可能をすかさず見抜き、コンディヤックがその蓋然的な性格のゆえに切り捨てようとする仮説演繹法(systemes hypothétiques)をこそ唯一の可能な学問的方法として支持する。デイドロがそのために支払う代償は、仮説を全面的に検証することの不可能、学問の蓋然的な性格、その本質的な仮説性である。

あらゆる学問は仮説を形成することから始まる。仮説の形成とは相互に独立な諸感覚の間にはないはずの結びつきを創り出すこと、結びつきの根拠であるアナロジーを見出すことであり、知性に発見的機能を認めないデイドロがその権能を想像力に託すとき、形而上学は、その歴史上初めて、認識論における主役の座を想像力に配することになる⁽¹³⁾。「想像力とは形相と色の記憶である」(『ダランペールの夢』II, 178[傍点は筆者])と言うデイドロにとって、想像することは知覚することそのものの再現であり⁽¹⁴⁾、記号的再現でしかない記憶とは厳格に区別される⁽¹⁵⁾。いや、諸感覚の間に論理的には肯定することのできないアナロジーを想像力が創出するとき、想像することはもはや知覚を再現すること以上である。

「自然の厳密な模倣は芸術を貧しく、小さく、卑しいものにする。[……]。自然の模倣が誇張され美化されてこそ、美と真理は生まれる」(『1767年のサロン』XI, 373)。

実在の忠実な写しは「だまし絵(trompe-l'œil)」であってまだ真理ではなく、天才画家は単なる肖像画家とは異なるのでなければならない。オリジナルに似ていないコピーほど美しいという逆説は、実のところ、プラトンがすでに用いており、デカルトが感覚の記号的性格の強調のために援用するトリックでもある⁽⁴⁶⁾。上の引用はデイドロがそのトリックを共有することの証拠であり、そのトリックを真に受けるならば、自然は解釈されてこそ、しかも誇張されてこそ美しいのであり、そのように考えるならば、コスモスあるいは「存在の連鎖」とは、ありのままの自然の姿であると言うより、その解釈によって美化された結果なのである⁽⁴⁷⁾。

ないはずの結びつきを感覚データに与えて体系を築き上げる想像力、それはアナロジーを創出する直観であって、本質を洞察する知的な直観ではない。誇張するどころか捏造すらしてしまう想像力は、デイドロにとって、自然を統一的に眺めようとするあらゆる知的営みの原動力であり、したがって、想像することは哲学することの最初の手続き、その出発点である。あらゆる合理性の正しくその根に非合理性が横たわっており、非合理性からこそ合理性が生まれ出でくる、というわけである。

そうはいうものの、デイドロは光の哲学者であり、われわれは、彼を非合理主義者と考えることには断固として反対しなければならない。そもそも、捏造することが真理の源泉であるとまで言うならば、それは上のトリックに騙されているのであって、デイドロがトリックを用いるのは決して読者を騙そうとするからではなく、それが人間的な合理性を構成するカラクリだからである。合理性は人間的なもの、その構成の産物であるにしても、真理は決して人間的なものではない。というのも、経験論者デイドロにとって、真理の源泉は経験であり、われわれの意に反して与えられる感覚データこそがリアリティーなのである。

自然の解釈を許すモデルは自然との接触から出発して形成されなければならないのであって、解釈者の内側から恣意的にその外側へと押し付けられるようなものであってはならない。デイドロが意識の透明説を採用しないことはすでに言及したけれども、アナロジーを創出して仮説を形成する想像力、そのデイドロの直観の霊源は、実は、習慣化された結果としてもはや意識されることなくなった経験である。学問とは、結局のところ、感覚経験と想像力、実験と理論との間の絶えざる往復運動(va-et-vient)なのであり、その仮説的な性格がどれほど強調されるにしても、非合理そのものでは決してないのである。

2. 疑わしい唯物論(le matérialisme problématique)

自然学はいまや自然についての解釈あるいは夢であり、そのあらゆるテーゼが本質的に仮説的な性格を帯びている。経験が検証を繰り返すように見えるテーゼですら仮説でしかないし、しかも、美しい自然を構成する秩序そのものが流動的であるから、その検証の成功も一時的なものでしかない。学問に二重の足枷を嵌め込むディドロは、そうすることによってあらゆる種類のドグマに対する二重の防波堤を張っているわけである。あらゆる種類の永遠性を決定的に諦めること、論理的には自滅的に見えるこのような態度を貫くことこそ、実は、学問の可能性のための人間的な救済措置であり、蓋然性に甘んじるというコストを支払うことは、とどのつまり、神学に対するあらゆる負債から学問を免責することに通ずるのである。

ディドロは、だからこそ、同じ唯物論の支持者を批判することができるし、その批判には、実際のところ、容赦がない。ディドロの気まぐれを非難する伝統はフィロゾフたちの身内の揉め事に眉をしかめるかもしれないが、われわれは、次に、唯物論を支持することあるいはそのテーゼの詳細が問題なのではないということ、そうではなくて、その支持の仕方、そのテーゼのステータスこそが問題なのである、ということを見てみよう。同じ種類の唯物論を支持しながらも、独断的にそのテーゼを提出する者、そのような者こそがディドロの容赦のない批判の餌食なのである。

2.1. 物質の一般的特性としての感覚性(sensibilité)

歯車をどれほど巧みに組み合わせれば生命を誕生させることができるのだろうか。自然発生を認めない生命現象の観察者たちは機械論に対する不満を募らせており、唯物論者ビュフォンが、だからこそ、生命原理をあらかじめ物質に認めるというアドホックな解決策を提出したことはすでに言及した。トレンプレーが水棲のヒドラ(polype)を発見するのは1740年のことであり、その腔腸動物の自己再生能力は多くの唯物論哲学者に強い靈感を与えることになった。最初に反応したラ・メトリーの『人間機械論』(1748)が物質に自己再生能力を与えるとき、神学の生物学に対する発言権は完全に剥奪されてしまう。

モーペルチュイが精神的実体を捨てて物質分子に感覚性を与えるとき、ライプニッツの予定説はすでに唯物論へと大きく傾斜するが、その傾きに拍車をかけ、徹底的な唯物論の可能性を白日の下に晒してみせること、ディドロの目論見にはそれだけで足りる。

「もしバウマン博士[モーペルチュイ]が彼の体系をその正当な限界に限定し、彼の思想を魂の性質にまで広げることなく——私はそこから彼に反対して彼の思想を神の存在にまで持ってゆくことがで

きるということを証明したと信じる——、動物の形成にだけ適用したのであれば、彼は有機的分子に欲望、嫌悪、感情、思考等を付与することによって、かの最も誘惑的な唯物論などに陥ることはなかったであろう。有機的分子には、全能の神が最も愚かで死んだ物質に最も近い動物に与えた感覚性よりもはるかに小さい感覚性を仮定することで満足するべきであった。この密やかな感覚性と形状との相違の結果として、何らかの有機的分子にとってはある一つの状態しかないということになるであろう。この分子は、動物がほとんどすべての機能を停止させる睡眠の中にあつて休息[静止]に最も好都合な姿勢が見つかるまで体を動かすように、無意識の不安によって、あらゆる状態の中から最も好都合な状態を絶えず求めるのである。このただ一つの原則だけで、パウマン博士が説明しようと企てた諸現象や、わが昆虫の観察者たち全員を仰天させている無数の驚異を、十分簡明、かつ何の危険な結果をも伴うことなく説明できたであろう。この原則は動物一般を、物質一般の創造者が様々な有機的分子に与えた鈍くて密やかな触覚に似たある感覚的刺激によって互いに結合し、最後には各々が自分の形状と静止とに最も好都合な場所に出会うことになる、そのような様々な有機的分子の一体系として定義したことであろう)(『自然の解釈に関する断想』50)。

欺瞞のレトリックがデイドロをして宗教的な正統派の名を騙らせているのであり、われわれは、上の引用の中に、モーペルチュイの唯物論を批判する口実の下に、さらに徹底的な唯物論を推進しようとする真のデイドロを見出さなければならない。感覚性は物質の一般的な特性であり、その活性化が生命の誕生を、その不活性化が死を説明する。無機物と有機物とは相互に変換しうるのであり、だからこそ、「存在の連鎖」は決して永遠ではありえないというわけである。ニーダムの実験が自然発生説を検証したと主張するならば(*Nouvelles Observations*, 仏訳 1750)、デイドロはそれを物質一般に内在する感覚性の活性化の証拠と受け取り、徹底的な唯物論に対する自信をますます深めるであろう。

2.2. 仮説あるいは理想

新しい観察が新しい発見をもたらし、物質一般に感覚性を与えることの必要は、自然哲学者にとってますます差し迫ったものになってくる。それに応じて感覚性の唯物論を徹底し、その確からしさの自信をますます膨らませてゆくデイドロは、しかしながら、最後の一线だけは決して踏み越えようとせず、踏み越えてしまった同じ主張の持ち主たちに対しては、執拗な批判者へとその身を転ずる。

「私としては、あくまでも実験や観察によって、物的な感覚性が不可入性と同じくらい本質的に物質に帰属することを厳密に論証してくれるか、あるいは、組織化からそれを反論の余地なく演繹して

くれる者の方を[エルベティウスよりも]高く評価したい)(『エルヴェシウス著『人間論』に対する逐条的反駁』II 301)。

われわれは、ここで、デイドロが自然学に対する形而上学の立場を再逆転させていることを指摘することができる。デカルトがその『哲学原理』を「人間的認識の原理」について論ずることから始め、そこからの演繹の結果としての宇宙生成論を提出するとき、それが教科書であることを思い起こすならば、デカルトの意図はスコラ哲学における学問研究の順序を覆すことにこそあったのである。「人間認識の始まり」について反省することのない無神論者の知識はまだ学問ではない。形而上学(*meta ta physica*)は、ここでは、自然学に先行する身分、自然学にその基礎づけを与える優越した身分を享受している⁽¹⁸⁾。

経験論者デイドロの学問論は、反対に、まずは経験することから出発して、そこに一般性を推測することを命ずる。

「推測(Conjecture) : ある一定の度合いの本当らしさしか持たない諸証拠、すなわち、一方が存在すれば他方も存在すると積極的に確信することができるほど十分には、その存在者が、結論される事柄と緊密な関係をもたない諸状況に基づく判断のこと。[...]。だが、何ものがこの関係を見積もることができるか。経験だけである」(『百科全書』Art. « Conjecture »)。

一般性を追求する哲学は、経験から出発するにしても、結局のところ推測であり、その本当らしさの度合いを見積もることができるのもまた経験だけである。経験が失われるならば、哲学がその一般性を論ずる質料が失われ、検証を怠るならば、哲学がそこから逃れようとする誤りの危険に晒されるというわけであるから、経験の周囲を巡るだけの形而上学は、ここでは、自然学(実験科学)にそのイニシアチブを完全に譲り渡してしまっており、その後塵を拝する身分に逆戻りしているのである。

そうは言っても、検証がテーゼの是非に決着をつけるべきものであり、テーゼがあつてこそその検証であるならば、哲学あるいは理論の側にも、経験に対してそのイニシアチブを振るう余地は残されているわけである。デイドロは、実際、コンディヤックの主張する純粋な経験論の可能性を支持せず、したがって、ベーコンにも反対して決定実験の可能性を信じていない⁽¹⁹⁾。哲学とは、とどのつまり、自然学にとっての地平線あるいは理想のようなものであり、自然学がそこを目指しながらも、そこに到達することの永遠にありえないゴールのようなものであると言えるであろう。

光の世紀は化学が科学として現れ出ようと胎動する世紀である。デイドロは、錬金術

からまだ完全には切り離されていない化学を⁽²⁰⁾、その学問としての未熟さを承知の上であらゆる学問のモデルとして採用しようとする。神智学者パラケルススを憧憬するディドロは、その本質的にオカルトな性格にこそ、学問の本質的なあり方、その必然的に仮説的な性格を見定めようとしているのである。

結 問いかけとしての哲学

われわれは、モンテーニュの秤にその身を置くディドロにとって、哲学とは問いを立てることそのものであり、要するに、哲学することはパラドックスに自らの身を置くことにほかならない、と結論する⁽²¹⁾。

「私に要求すべきなのは真理を探究すること(chercher la vérité)であって、それを発見すること(trouver la vérité)ではない」(『哲学断想』29)。

ディドロは唯物論を徹底して神学を退けることに心血を注ぎながらも、その徹底された唯物論を真理であるとは断じて肯定しない。人間存在の有限さに対する冷めた洞察こそが一般性の探求に熱狂するディドロを蓋然主義者に押し止めているのであり⁽²²⁾、それが神を論ずることの熱狂からの目覚めであるならば、ディドロはなるほど啓蒙主義者なのである。

人間の認識の始まりを論じて、それを基礎づけようとするアイデアほどディドロから遠いものはない。われわれは、ここに、知のパラダイムの重要なシフト、あらゆる存在者に一義性(ens commune)を認めて神すらも存在者と見なす存在-神論の伝統から保証人なしに人間存在を論ずる人間学への移行を読み取ることができる。その確からしさを請合う保証人をもはや持たない人間学、そのようなディドロの人間学の拠り所、われわれはそれを「心情(cœur)」の一語で表現できるであろう。

「哲学という地獄の中で途方に暮れることに私は怒りを覚える。精神(esprit)はそれを肯定せずにはいられず、心情は否定せずにはいられない」(Lettre à Sophie Volland du 15 octobre 1759, II 282 [傍点は筆者])。

さらに「心情」を「常識(sens commun)」と言い換えるならば、ディドロの人間学がその確からしさの拠り所とする「常識」、その正体が習慣の形成の結果、最も人間的な構成の産物であることが分かってくる。

「ディドロ：何ごとにおいてであれ、私たちの本当の意見(notre véritable sentiment)というものは、決してぐらついたことのない意見をいうのではない。そうではなくて、私たちが最も習慣的に(le plus habituellement)立ち帰っていくような意見を指すのだ」(『ダランベールとディドロとの対話』II 119-121)。

習慣の教える確からしさに甘んじること、それは、しかしながら、人間の有限的な本性を改めて際立たせることでしかなく、古典的な哲学者の眼には最も悲劇的な主張に写るかもしれない。だが、人間精神の有限性を悲しむ以上に哲学の独断を嫌悪するディドロ、その徹底的で辛辣な批判が、同時に、どこか楽しげにも見えることをわれわれは告白したい。自ら哲学者でありながらどのテーゼにも安住しようとしないうディドロ、彼は自分がリベルタンであることこそ哲学者としての最上の喜びを見出しているのであり、われわれは、ここに、有限者であることこそ人間の完全性(perfectibilité)を見出すことのできる人間的哲学者の登場を認めないわけにはいかないのである。

註

- (1) 世界大思想全集、社会・宗教・科学思想篇6、竹内良知(訳)、河出書房、1959、p. 63。
- (2) 『百科全書』刊行の大事業を準備する時代背景、その知的興奮と社会的な状況については、cf.、中川久定、人類の知的遺産41『ディドロ』(講談社、1985)、p. 5-24。
- (3) Cassirer, Ernst, La Philosophie des Lumières, Paris, Fayard, 1966。
- (4) 小場瀬卓三『ディドロ研究』上巻、白水社、1961、中巻、白水社、1972(下巻は未刊)。
- (5) ディドロ哲学の整合的再構成については、Schmitt, Eric-Emmanuel, Diderot ou la philosophie de la séduction, Paris, Albin Michel, 1997を導きの糸とする。
- (6) 「個別的あるいは一般的なある事実の単なる叙述に厳密に還元できないようなすべての命題にはリアルで理解可能ないかなる意味もない」と主張する経験論者コントが、そうはいうものの、「本当の実証的精神は、神秘主義と縁遠いように、実は、経験主義からも遠く隔たっている」(『実証主義精神』3)と言うとき、それは純粋な経験論の不可能を宣言しているのである。洗練された経験論である実証主義は、生の経験ではなく常識から出発する：「本当の哲学的精神とは、そのあらゆる本質的局面上において、真に力の及ぶあらゆる思索にまで、単なる良識を体系的に拡大することにある」(ibid., 8)。
- (7) ディドロのテキストについては、アセザ版ディドロ全集(1^{ère} édition de J. Assézat et M. Touneux, Œuvres complètes de Diderot, Paris, Garnier, 1875-1877, 20 volumes)から引用する。
- (8) Ray, L'Existence et la Sagesse de Dieu manifestée dans l'œuvre de la création (仏訳 1714 et 1729) ; Derham, Théologie physique (仏訳 1726) ; Nieuwentyt, L'Existence de Dieu démontrée par les merveilles de la nature (Amsterdam, 1715, Paris, 1725 et 1760) ; Fénelon, Existence de Dieu tirée de la connaissance de la nature (1712) ; Fabricius, Théologie de l'eau (1734) ; Lesser, Théologie des insectes (仏訳 1742) ; Réaumur, Mémoire pour servir à l'histoire des insectes (1734-42) ; Jan Swammerdam, Biblia naturae (1737) ; Pluche, Spectacle de la nature, ou Entretien sur les particularités de l'histoire naturelle qui ont paru les plus propres à rendre les jeunes gens curieux et à leur former l'esprit (1932, un complément en 1739 avec l'Histoire du ciel)。
- (9) 1676年に顕微鏡を用いて微小世界を開拓するレーウエンフックは、翌1677年、すでに発見されていた精子を人間の幼生として同定する。

- (10)「万物は変化し、万事は移り行く。もとのままなのは全体の量のみである。世界は絶え間なく始まり、かつ終わっている。刻々が始めであり終わりである。そのほかのいかなる時刻も持たなかったし、また決して持たぬであろう。この洋々たる物質の大海の中であって、唯一つの分子といえども他の分子に似通ってはいない。一瞬一瞬といえども自分自身と同一な分子は一つも存在しない」(『ダランベールの夢』II 132)。
- (11)「人間精神と哲学の面目丸潰しではあるが、最も不条理でありながら、最も克服しがたい学説」(『盲人書簡』III 304)。
- (12)「クロインの司教：「山に登ろうとも、谷に下りようとも、私が知覚するのは私だけである。それゆえ、私だけが存在するという事は可能である」。パークリーはまだ答えを待っている。自分自身の身体の実存存在を感覚と結びつけること、それすら容易なことではない」(『クラウディウスとネロの治世に関する試論』(1782)III 257-258)。
- (13) 想像力は、「感覚を憶見と組み合わせたもの」(プラトン『ソフィスト』264 b)と定義されるならば、誤謬の源泉としてエピステーメーの形成から追い払われるし、「現実態にある感覚が引き起こす運動」(アリストテレス『靈魂論』427 a)と定義されるにしても、所詮は、認識の形成にその質料を提供するだけのことである。
- (14)「想像力は像を想起する能力である」(『劇作論』VII 333)。
- (15)「記憶は記号であり、想像は対象である」(『生理学原理』IX 436)。
- (16)「絶対的な言い方をすれば、質についてその像が形成される対象、それが像であるべきならば、その全体を表現してはならない」(プラトン『クラテュロス』432 b)。「視覚像の完全性は、それが可能なほどには事物に似ていないことに依存する」(デカルト『屈折光学』IV, AT VI 113)。
- (17) 誇張するためには情念に強く動かされることが必要である：「人は無闇に情念を排斥する、即ち人間のあらゆる苦悩を、情念の為として、情念が同時に人間のあらゆる喜びの源泉であることを忘れている。[...]併し、情念、諸々の偉大なる情念のみが、人間の魂を偉大なる事物に到達せしめるのである」(『哲学断想』1)。天才的直観の根に熱狂を読み取るディドロのヒロイズムもまたデカルトのストア主義批判を受け継いでいる。
- (18) アリストテレスのある一連の講義録に与えられた名 *meta ta physica* について、司書でなく哲学者としてその名を解釈する可能性については cf., P. Aubenque, *Le problème de l'être chez Aristote*, Paris, Puf, 1962, 1997², p. 28-44)。
- (19) ディドロは、実際、モリヌクス問題が実験による解決(Réaumur, 1728)を得て、その軍配が経験論者の側へ上がるように見えたときですら、その軍配に従うことを躊躇する。
- (20) 1772年に燃焼に関する実験を開始するラヴォワジエは、ディドロの死の前年である1783年、キャヴェンディッシュのプロキシトン説を批判して水素を同定する。
- (21)「哲学者とは、ディドロに従うならば、オイディプスであるよりもスフンクスである」(Schmitt, op. cit., p. 223)。
- (22)「凡庸な俳優をつくるのは鋭い感覚性だ。無数の大根役者をつくるのは鈍い感覚性だ。そして卓越した俳優をつくるのは感覚性の完全な欠如だ」(『俳優に関する逆説』VIII 370)。

Paradoxe sur les philosophes

—le matérialisme diderotien ou l'anthropologie—

Takehiro SAWAZAKI

Diderot, premier philosophe des lumières, chef des encyclopédistes, mais minimisé aujourd'hui au nom de son caprice, incarne le paradoxe sur les philosophes, l'*aporia* du fondationisme, difficulté foncière moderniste de radicalement se justifier. Lui, idéaliste empirique, ne se lasse jamais de condamner le dogmatisme, religieux ou philosophique, alors qu'il est toujours partisan du matérialisme radical avec conviction, cela dit, dont il abandonne à la fin la totale vérifiabilité, pas du tout désespéré, mais très volontiers. Paradoxe ? Je réponds oui. Cependant, à vrai dire, la philosophie diderotienne, paradoxale d'ailleurs, n'est point contradictoire, seulement très compliquée. Comment donc ?

Diderot, sensualiste, est tellement sensible à la finitude de l'esprit humain qu'il se décide à se résigner à tâtonneur, en renversant sa valeur pour découvrir la perfectibilité de l'homme, la condition de possibilité de la science et la morale anthropologique. L'anthropologiste tâtonne et zigzague donc toujours, sans jamais avancer tout droit, ni jamais sauter, ni jamais s'arrêter, toujours en visant le but en vaine. Le but, ou bien l'horizon, c'est exactement le statut de la science humaine, et l'établir, c'est bien le travail des philosophes. Aussi, Diderot, philosophe probabiliste, adopte la doctrine matérialiste radical que les nouvelles observations microscopiques lui semblent soutenir, en tant que l'hypothèse la plus probable, non que la thèse bien prouvée.

De toute façon, le matérialisme diderotien ou l'anthropologie, c'est le système à jamais hypothétique, sans jamais définitivement vérifiée. Alors, on se demande s'il nous permet la progression, truisme des philosophes des lumières ? Si oui, sur quoi se repose-t-elle ? Sur le sens commun, Diderot nous répond-t-il, qui est le sentiment « auquel nous sommes le plus habituellement revenus ». Je conclus donc que l'anthropologie diderotienne est la philosophie du sens commun.